

ことばだより



●目次

巻頭随筆 ことばの力.....やえがしなおこ.....2

国語

特集 新学習指導要領で国語の授業はどう変わるのか

「主体的・対話的で深い学び」とそれを支える「言葉による見方・考え方」.....児玉 忠.....3

「主体的・対話的で深い学び」の生まれる国語の単元をつくるには.....大塚健太郎.....6

新聞を活用し、考えを深めることができる児童の育成.....林 一真.....10

書写

用紙の大きさや形を考えて書く——小筆を使って——.....向後理恵.....12

ことばの力

やえがしなおこ

童話作家



絵本作品を書いてみませんかとお声をかけていただいて、勢いこんでみたものの、物語をつくり短いことばで紡いでいくのは、なんと難しいことでしょうか。考えあぐねているうちに、わたしはいつのまにか、古い民話絵本を開いていました。

——じいさんが しつぽに つかまって、まなこを つむると、するするすると あなたの なかへ はいったようで、あとは こうこうと、かぜを きって とんでいく おとがしました。

瀬田貞二 再話『ねずみじょうど』

ことばと物語は、車の両輪のように、力強く響き合ってこそ。瀬田さんの語りは、歌のように心地よく、わたしの胸に響きました。

(こういふうに書きたいなあ。)

わたしは、ため息が出る思いでした。物語を読む、あるいは書く楽しさは、ことばを楽しむことでもあるでしょう。ある外国絵本の、翻訳例をあげてみます。直訳すると「みんなとてもよくにっていました。」のようになる部分です。

——「石井訳(中略)五にんは、とても よくにっていて、だれが だれやら くべつがつきませんでした。

竹内美紀『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのか』

※「石井訳」は、石井桃子による訳。

石井さんの「だれが だれやら」という表現の楽しさは、声に出して読んでみると、より伝わってきます。巧みな表現者は、からだのなかに

ことばのリズムがあり、その声を聞いているのかもしれない。

優れた文に触れ、ことばの声を聞くことは、いつもわたしを勇気づけ、表現の世界へ導いてくれます。

——その声は割れ鐘のように、静かな夜の山にひびいたから、平之もさすがに度肝を抜かれた。見ればおそろしい鬼である。身の丈は七、八尺か、からだじゅう針金のような毛におおわれ、目だけが、燠のように赤く、ぎらぎら光っている。

松谷みよ子「平之と与作」

——おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりがあって、まっ青なそらのしたにならんでいました。

宮沢賢治『どんぐりと山猫』

松谷先生の緊張感あふれる文、秋晴れの山を、「うるうるもりがあって」と書いた賢治さん。お二人の文には、詩の心と豊かなイメージがあふれ、何度読み返しても飽きることはありません。

ことばに触れるということは、それに連なる恐れや喜び、美しさや楽しさや、さまざまな感覚を呼び起こすこと。ことばは、からだのなかに清水のようにしみ込んで、いつかまたあふれてくる。そう思えば、ことばを紡ぐ作業は、やはりたやすくはないのです。からだのなかに響いてくる声を聞くような、そんな仕事をしたいと思います。

童話作家。「びわの実ノート」(松谷みよ子責任編集) 童話教室に学ぶ。「雪の林」で十五回 椋鳩十児童文学賞、第二十三回 新美南吉児童文学賞受賞。「ひろがる言葉 小学国語 3上」に「白い花びら」を掲載。「白い花びら」の絵本が、岩崎書店より出版された(絵 佐竹美保)。

国語

■ 特集 ■

新学習指導要領で国語の授業はどう変わるのか

「主体的・対話的で深い学び」とそれを支える「言葉による見方・考え方」

宮城教育大学教授

工たくま玉たけし 忠ただし



中教審教育課程部会国語ワーキンググループの委員を務める。小・中学校の国語教科書における教材の研究や、作文・児童詩を中心に「書くこと」の学習指導について研究している。著書に「見つめる力・発見する力を育てる児童詩の授業」（銀の鈴社）などがある。

一 新学習指導要領のポイント①
「言語活動」と「主体的・対話的で深い学び」の関係

教材を教えるのではなく教材で教えること。そのために、活動を通して能力を育成すること。近年の学習指導要領は、一貫してそうした理念をもってきた。「言語活動の充実」といったスローガンも、そうした理念に支えられたものである。

しかし、よくよく考えてみれば、全ての国語の授業はそもそも言語活動だけで構成されているものであり、「言語活動の充実」などといったスローガンも、国語科にしてみればあたりまえのことを言っているにすぎないようにもみえる。

その意味で、学習指導要領のいう「言語活動」とは、「指導事項に示さ

れた付けた能力と密接に関わる（その能力を付けるために手段とした）「言語活動」のみをさすものであり、加えて「能力が付いたかどうかを指導者が見取り・評価することを前提に、学習者が全員で取り組む言語活動」のみを指すというふうには、いわば限定的に理解すべきものであるといえる。

新学習指導要領に向けては、こうした言語活動を位置づけた授業の学習過程を改善するものとして、「アクティブ・ラーニング」という用語・概念が示された。その後、この用語・概念は「主体的・対話的で深い学び」と言いかえられ、中教審の答申において次のように示された。

○ 国語教育の改善・充実を図るためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、後述するアクティブ・ラーニングの三つの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。このため、国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とは、アクティブ・ラーニングの視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると云える。

・ 「主体的な学び」の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり

自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。

・「対話的な学び」の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。

・「深い学び」の実現に向けて、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることが重要である。(注1)

(傍線引用者)

ここからは、「アクティブ・ラーニング」すなわち、「主体的・対話的で深い学び」は、言語活動を位置づけた授業における学習過程を質的に改善する視点として示されていることがわかる。つまりは、小・中学校の国語科がこれまで継続的に取り組んできた「言語活動の充実」という旗が今後は降ろされてしまうとか、指導の重点が「言語活動」から「アクティブ・ラーニング」に取って代わられてしまうといったことではな

いことに留意が必要である。

新学習指導要領の国語においても、平成二十年度版の学習指導要領と同様に、三領域(話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと)にそれぞれ十例程度、合計で三十例程度の「言語活動例」が示される。その意味で、「アクティブ・ラーニング」の三つの視点(主体的な学び、対話的な学び、深い学び)は、国語科の授業において学習指導要領が示すような「言語活動」を位置づけることを前提に、その学習過程を質的に高めるための視点として示されている。

二 新学習指導要領のポイント② 「深い学び」を支える「言葉による見方・考え方」

もともと「見方・考え方」という用語・概念は、今回の中教審においてその審議の過程で登場してきた用語・概念であり、当初、中教審の総則・評価特別部会で、次のように議論された。

○ 「論点整理」を踏まえ、現在、各教科等を学ぶ本質的な意義について、資質・能力の三つの柱や学習プロセスの在り方について各教科等別WGで議論されているところである。こうした資質・能力の育成に当たり重要となるのが、各教科等の本質に根ざした見方や考え方(以下「見方や考え方」)が重要であると考えられる。(以下略)

○ 「見方や考え方」とは、様々な事象を捉える教科等ならではの視点や、教科等ならではの思考の枠組みであると考えられる。(以下略)

(注2)

その後、この「見方や考え方」という用語・概念は、「見方・考え方」と表現を変えながら、各教科等の本質に関わってその目標を支え、かつ「アクティブ・ラーニング」の三つの視点のうち、とりわけ「深い学び」を

その質的側面から支える重要な概念に格上げされている。おそらくは、「アクティブ・ラーニング」が活動主義に陥ってしまったため、楔くわしとしての役割が期待されると考えられる。ちなみに、国語科以外の教科では「見方・考え方」は次のように定義されている。

○ 「社会的な見方・考え方」は、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であると考えられる。(以下略)(注3)

○ (中略)「理科の見方・考え方」については、「自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること(中学校の例)」と整理することができる。(注4)

これを見ると、「見方・考え方」を、社会科では「視点や方法」として示している一方で、理科では「考えること」、つまり「内容」として示している。すなわち、「視点」や「枠組み」としての「見方・考え方」は、教科によっては「視点や方法」だけでなく、「内容」としても示されていることがわかる。そして、国語科においては「言葉による見方・考え方」として、次のように示された。

○ (中略)自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることを、「言葉による見方・考え方」として整理することができる。(注5)

これを見ると、「～すること」を、「方とする」といった表現上のねじれがあり、理科と同様に、「言葉による見方・考え方」を内容的に(「～こと」として)定義しようとする意図と、社会科と同様に方法的に(「～の仕方」として)定義しようとする意図とが混在していること、すなわち、両義

的に用いられていることがわかる。

そうした意図をふまえて解釈すれば、「言葉による見方・考え方」には二つの側面があるといえる。一つは、学習者が自分でその言葉をどのように使うか(使っているか)についてを認識する、言いかえれば、「言葉についてメタ認知する」ための視点・方法としての側面、もう一つは、そのようにして捉えた言葉について、言葉と言葉(対象)とがどのような関係性をもっているかを学習者が問い直して意味づけるといった、内容としての側面である。

いずれにせよ、ここには学習者に言葉そのものを対象化させて、その関係性について考えさせるところに教科の本質をみようと考える方がうかがえる。すなわち、言語の教育としての国語科の本質が端的に示されているといえる。

なお、平成二十年度版の学習指導要領の国語において、「指導事項」の文言として「もの見方や考え方(小学校では「もの見方や感じ方」という表現が出てくる。しかし、この「もの見方や考え方」は、中教審の国語ワーキンググループのまとめでは、「言葉による見方・考え方」を働かせ成長させた結果として生まれるものとして位置づけられている。「言葉による見方・考え方」とは意味が異なるものであることに留意が必要である。

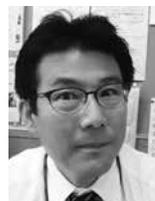
注1 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」平成二十八年十二月二十一日

注2 中央教育審議会 総則・評価特別部会 平成二十八年二月二十四日配付資料

注3・4・5 注1に同じ。

新学習指導要領に基づいた実践例

「主体的・対話的で深い学び」の生まれる 国語の単元をつくるには



東京学芸大学附属
世田谷小学校教諭
大塚 健太郎

三年生 単元名 生き物大好き三年一組 くメダカ・ヤゴ・ザリガニの

生態はいかに？

教材名 『めだか』 杉浦宏（三年上巻）

(1)教材について

童謡の一節から始まり、段落が進むにつれて子どもたちの知らない情報に至るといふ文章構成となっているため、興味をもって読み進めることができる教材である。

一方で、情報が大きいかみであり、子どもたちの知的好奇心を十分に満足させるまでには至っていない。そこで、『めだか』を読むことで生まれてくる疑問を解決するために、関連図書を二冊三冊とあわせて読み、情報を重ねていく、情報を確かめていくという、主体的で対話的な読み方を獲得できる教材と考え、指導計画を立てた。

まず、本教材は大きく二つのパートに分かれていて、前半には敵からの身の守り方が四つ書かれている。そのどれもがいつも成功するように読めてしまうが、これでは、敵であるヤゴやザリガニは、メダカを一匹

も捕らえられない。そこで、理科の学習やその他の情報と合わせると、これらの身の守り方は万能なのかという疑問が学習者に生じ、捕食者側の情報ももう少し欲しくなるところだ。

続いて、テキストの後半には、自然の厳しさに対応できる体の特別な仕組みについての説明が書かれている。この情報は、子どもたちにとって未知の領域である。経験上の知識も想像も及ばない領域の説明となる。ところが、自然の厳しさへの対応が簡潔にまとめられているため、生き物が好きな子どもたちにとっては、情報が少なすぎるように感じられ、追加資料が欲しくなることだろう。

(2)学習の目標と単元をつくり方

新しい学習指導要領では、現行の「書くこと」のように、「読むこと」の指導事項も思考過程ごとに示された。それぞれの指導事項と思考過程は次のとおりである。

ア 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。

叙述をもとに、文章の構造や内容を把握することに関する指導事項である。文章の構成や関係を捉えたり、内容の大体やあらすじを理解したりする過程を示している。

ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。

文章などを詳しく読んだり、意味づけたりすることに関する事項である。意図や目的をもって、さまざまな視点から文章の構造や内容を詳しく読んだり検討したりする過程を示している。

オ 文章を読んで理解したことを基づいて、感想や考えをもつこと。文章などを読んで理解したことを、体験などと結びつけて、感想をもつたり考えたりする過程である。

カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。

文章などを読んで感じたり考えたりしたことを共有し合い、違いに気づいたり自分の考えを広げたりする過程である。

(ここでは、中学年の説明的文章を対象にしているので、それに関わる指導事項のみ引用・掲載した。)

この「読むこと」の思考過程は、どの単元を学ぶにあたってはまるものであるが、単元によって重点の置き方が異なってくるのである。

また、この思考過程をたどり、言語活動を行うのであるが、身につけるべき知識・技能も学習指導要領の中で明示されている。その関係は固定されているわけではなく、単元に応じて授業者が組み合わせていくのである。今回は、「知識及び技能」(2)情報の扱い方に関する事項の「ア」考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。」と組み合わせることとした。

本単元の動力は、子どもたちがもつ生き物への興味・関心である。本学級でいえば、ヤゴや青虫を教室で飼育している環境によって、この情報を自分とは無関係の情報と捉えず、自らの学校生活に生きる情報として捉えることができる。この環境を整えることこそが、主体的に学ぶための素地となる。

次に、子どもたちは教科書教材『めだか』と出合う。これは、「メダカ」という生き物についての情報の提供とともに、三年生としての読みの力を獲得するためのテキストという側面もあわせもっている。そのため、付箋を使って整理する「トリオ読み」(4)指導のポイントで詳しく述べる)をおして、書かれている情報の獲得と文章構成の理解という指導事項のC(1)ア・ウを重点とし、一人では行えない指導事項のC(1)カもあわせて重点としたい。

これと並行して、『めだか』では得られない、理科学習やその他、日常生活の中から得られた情報との出会いから、新たな課題が生まれてくる。そこで、教科書教材『めだか』の構成を模し、ヤゴの生態を説明した自作教材『トンボのよう虫 ヤゴ』を与えることにした。『めだか』で獲得

した読みの力を発揮させて読み進め、ヤゴの視点からメダカを考えることができるようになる。考えたからである。そして、このことが「情報を一視点からのみで評価しては危険である。」「知らない世界がまだ外側に広がっている。」と考えるきっかけとなるのである。つまり、学習指導要領との関係でいえば、先ほどの「知識及び技能」(2)にあたる、筆者の考えを支える理由と事例について反証を行い、メダカやヤゴ、その他の生き物からの視点で比較して、情報を整理していったのである。

(3)学習計画

0次	1次
理科における青虫の飼育。ヤゴ捕りとその後の飼育。観察自学ノートを用いた、それらに関連する調べ学習。	1時 ・『めだか』に出合い、黙読する。 ・感想を交流し、みんなの感想が違うことに改めて気づく。 C自分が気づかなかったことに気づかされた。 Cもつとたくさんさんの情報が得られるはずだ。 Cもう一回しっかりと読み直したい。
	2時 ・「トリオ読み」に挑戦し、本文の前半部分について、付箋の整理をする。
	3時 ・整理した内容をクラスで共有する(書かれている事柄とその本文への登場順、読んだ感想)。 C同じことが書いてあるね。↑C付箋を重ねてみよう。 Cこれはどこに書いてあるの?↑C教科書を読み直そう。 Cこれを書いたのは自分だけだ。↑C本当だ。気づかなかったよ。
	4時 友達と確認しながら読んで安心だった。 付箋を使って、自分だけの読みを説明できて嬉しかった。 もう少し整理の時間が欲しい。
	・本文の後半部分に書かれていることと、それを読んだ感想を整理する。

二次	5時	<p>(事柄を正しく読み、感想・考えをもつことをとおして、作者の思考に気づく。そのためのだてとして、事柄への疑問を他の本で調べる。実際に観察してみる。関係者に聞く。他の視点が必要と知る。などがある。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『トンボのよう虫 ヤゴ』に出合う。 ・黙読しながら、読み取った事柄を付箋にまとめる。 ・画用紙に付箋を整理する。 <p>(二人では自信のない子の感想を拾う。「トリオ読み」の経験想起させる。)</p>
三次	7時 8時	<ul style="list-style-type: none"> ・『トンボのよう虫 ヤゴ』から読み取った内容を、個人でノートにまとめる。 ・C他の敵の本はないかな? ・Cみんなが読み取ったことを交流したいな。 ・C図鑑を持ってきたから、みんなで読みたい。 ・Cメダカについて、もつと調べたい。 ・Cメデイアルーム(図書館)に行つて調べたい。
四次	9時	<ul style="list-style-type: none"> ・図鑑での調べ方を学ぶ。 ・メデイアルームで図鑑を調べる。 ・捕食者側の生き物の本を探す。 ・持ってきた図鑑などを読む。 <p>・メダカとヤゴ(ザリガニ)の関係を今までの情報をもとに話し合い、自分の意見をノートにまとめる。</p> <p>・情報の取り出し方について確認する。</p>

(4) 指導のポイント

「トリオ読み」が、本単元の肝である。児童は『めだか』を読み、書かれている事柄を整理していくなかで、さまざまな疑問が生じるだろう。

そこで、皆で力を合わせて読めば、自分たちの疑問が解決できるかもしれないという、期待感をもたせることが大切となる。三人寄れば文殊もんじゆの知恵ではないが、話を進めやすく、責任を果たすことへの緊張感が程よく感じられる、一緒に読み進める三人組をつくることから始める。

まず、一人で読み進めて得た情報を付箋に書き出していく。書きためた付箋を三人が持ち寄り、何が書かれているかを吟味していくのである。付箋を確認する際には、その付箋はどこを読んだときに書いたものかを振り返り、叙述に根拠を求めようにする。この根拠となる叙述を段落ごとに整理することで、段落相互の關係に着目するようになり、根拠となる箇所を三人でもう一度読み直し、付箋の内容を吟味することになる。つまり、三人で指導事項のC(1)アの過程を行つていくことになる。

そして、知りたいと思つたことの追究や、疑問を解決するために主体的に読み進めるといふ目的を確認し、段落ごとに整理された付箋を読み直し、段落の中心となる言葉を探したり、見出しをつけたりして、三人の集めた情報を整理しようとする。何が書かれているかを三人で整理することで、お互いに「なぜ付箋に書いた内容がずれているのだろうか」という対話が生まれ、そこに何がどのように書かれているのかを主体的に確認することになる。付箋を操作して段落構成を理解するようになり、三人の付箋をまとめることで、最終的には内容を三人で要約していることになる。つまり、指導事項のC(1)ウの過程を通過したこととなる。

三人組で取り組んできているので、つまずきのある子は、できている子をモデルとして学ぶことにより、どんな言葉が中心となるのかをつかめるようになる。また、できている子は、他者の質問に答えたり、教えたりするため、そこで発揮された知識・技能をメタ認知していくことになり、より高次な理解へと発展する環境が整うのである。この活動をとおして、「読むこと」の能力の個人差をある程度なくし、また、互いに尊重し合う学習者として育ち、高め合う關係性を構築していくことができるのである。これは、本単元だけでなく、この先の学習を展開するうえ

で貴重な環境となる。

そして、個別に読んできた内容を、三人で確認していく作業を繰り返すことで、おのずと自分の読みが更新され、自信がついてくる。内容を正しく理解したうえで、自分の感想をもつことができるようになる。つまり、当初の疑問に自分なりの答えを出したり、さらに問いが生まれたり、感想の違いを受け止めたりと、指導事項のC(1)オの過程を無理なく行えるのである。

このような学習を続けてくると、お互いに尊重し合う学習者集団が学級の中に生まれることになり、自分の考えを互いに交流し合うことが、自信をもってできるようになる。つまり、指導事項のC(1)カのステージに自分事として参加できることになるのである。この経験は、中学年の子どもたちにとって、とても貴重なことで、積極的に学習に参加すると自分の考えが更新されるという経験は、さらなる主体的に学ぶ姿へと繋がってゆくのである。

(5)実践での留意点

単元との出合わせ方は、最大の山場である。教室で「ヤゴ」などの生き物を飼育していれば、子どもたちが主体的になるかといえ、そうではない。子どもたちが、テキストの内容に関心をもつために、話題を常に意識させておくことが大切である。今回ならば捕食と被食の関係性である。また、中心となりそうな子に、あらかじめ捕食と被食の関係にあるヤゴとメダカのことなどを質問して、テキストだけでは至らないと思われる関係性について、話題が広がるように仕掛けておくのである。

次に、教材分析でも明らかにしたが、三年生の発達段階でさらっと読んでしまえば、メダカは常に敵から逃げられるかのよう錯覚するおそれがあるため、考えさせたい箇所をあらかじめ把握しておくことが大切である。そして、子どもの思考がそこに立ち止まれるよう、「なんでこうなるのだろう」などと言いながら、多少オーバーにでも立ち止まり、範

読していく演出も必要だろう。

最後は、人間関係である。教室の学びでは、それぞれの子どもは互いを高め合うために存在し、その責任を果たすのは一人一人であるという意識を徹底させることである。学ぶ時に、学力差が邪魔をしない、信頼感で結ばれた学級集団をつくることで、指導事項のC(1)カの過程が実りあるものとなる。その思考過程だけでなく、「主体的・対話的で深い学び」が実践できるかどうかは、この学ぶ集団をつくるのが肝となるだろう。教室の一人一人が自信をもって仲間と学びに向かうとき、そこに一歩近づくことだろう。

(6)展望

この単元の先には、重ねて読む、真偽を確かめて読む、必要な情報を得るために読む、興味・関心のあるところだけ読むなど、読みの技術の多様性・個別性を保障する読み方へと発展することが予想される。そして、その時々々の必要性に応じるかたちで、図鑑の使い方や、そこで出会う言葉を獲得するための国語辞典の使い方といった、求められる共通技術を学ぶ授業が展開されていくだろう。また、出会うテキストも図書館活用の時間等を使って、多様性を担保したり、同じテキストでも求めるものによって、異なる情報が浮かび上がったりの経験をさせていきたいと考えている。

最後に、生き物が大好きで、ヤゴを飼い、羽化の様子を間近で観察した子どもたちならば、今までに出会ったテキスト群や理科学習などの学習知識や体験を合わせて、「メダカ」と「ヤゴ」の関係性を多面的に考えていくことが始まるだろうと期待する。それは、物事と自分との関係性を自ら問う姿への入り口となり得るからである。そして、本校では、この学習と近い時期に水族館へ行く遠足がある。その場をこの学習の続きの実の場として利用し、そこで出会った海の生き物を理解するとき、子どもたちの視野が広がっていることを成果として期待したい。

新聞を活用し、考えを深めることができる児童の育成



愛知県名古屋市長
白水小学校教諭

林一真

■新聞というメディアの特性

新聞は、検索機能をもったインターネットとは異なり、自分が探したい情報以外にも、政治・経済、国際情勢、文化やスポーツなど、さまざまな記事を一覧することができる。それらを読むことで、新しい情報に出会い、思いがけない発見をしたり、視野を広げたりできる特性をもつ。

■自分の考えを深める新たな一手

これまで情報活用の力を高めるために、児童が自ら必要な情報を集め、考えをまとめる指導を行ってきた。その中で、課題として挙げられたのが、まとめた考えを児童自身で見直す機会が少なかったことである。

そこで、一度まとめた自分の考えに関わりのある新聞記事を探す、という過程を盛りこむことで、新しい情報を手に入れ、視野を広げさせることができる。そして、この情報を使い、意見文として再構成することで、考えを深めさせることができる。

■実践の内容

六年生 単元名 「意見文を書く」
ねらい

総合的な学習の時間で、修学旅行先である京都・奈良の見学地や文化について調べたことや、実際に見たり、体験したりして得た情報をもとに、

自分の考えをまとめた。本実践では、その考えに関わりのある新聞記事を探し、意見文として再構成することで、自分の考えを深める。主として

○新聞の見出しを参考にして、自分の考えに関わりのある記事を探し、「新聞切りぬきシート」(下図参照)に貼る。

○初めて知ったり、印象的であったりした箇所

に蛍光ペンで印をつけ、感想を書き加えるようにし、自分にとって新しい情報は何かを確認できるようにする。

○記事から得た情報を使い、意見文として再構成するため、文を修正しやすいワープロソフトを活用する。

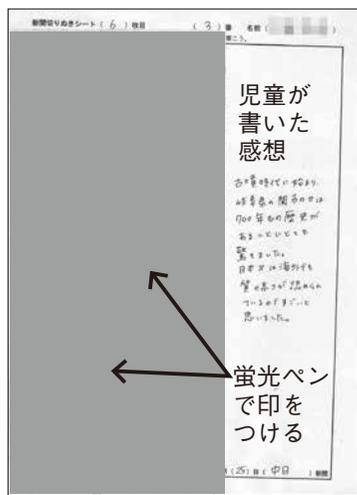
■学習活動と児童の様子

①興味をもって新聞を読めるように

児童が興味をもって新聞を読めるように、教室に「新聞コーナー」を設け、各新聞の第一面を掲示するなど、記事を比較しやすいような環境にした。また、「メディアのめ「工夫がいっぱい! 新聞作り」(NEWS for School)を視聴し、新聞の基本的な構成や読み方を学んだ。多くの児童が授業時間だけでなく、休憩時間もすすんで新聞を読む姿が見られた。

②見出しを参考に記事を探す

自分の考えに関わりのある記事を探すときに、見出しを参考に探させるようにした。見出しを見て必要だと感じた記事は、さらに本文を読んで、自分の考えに関わりのある記事かを確認させた。こうすることで、多くの記事に目を通させることができ、関わりのある記事を「新聞切りぬきシート」に貼らせることができた。



2015年10月25日 中日新聞朝刊16面

③新しい発見を実感する

本文を読み、初めて知ったところ、印象的であったところに蛍光ペンで印をつけたり、感想を書き加えたりして、記事の内容を熟読し、自分にとって新しい情報とは何かを確認させるようにした。こうすることで、自分の考えにはなかった新しい発見を実感し、考えの視野を広げさせることができた。

④意見文で使う記事を選ぶ

「新聞切りぬきシート」ができたところで、全てに目を通し、印をつけたところや書き加えた感想をもとに、自分の考えに組み込む情報を選ばせた。京都の友禅染め体験から、日本の伝統工芸に関心をもった児童は、「日本刀には七百年もの歴史がある。」「海外からも日本の伝統工芸が評価されている。」「といった新しい発見や、視野を広げる感想に着目し、意見文で使う記事を選ぶことができた。

⑤意見文をまとめる

意見文は、「起承転結」の構成で書かせた。はじめの考えを「起」「承」で、「転」に記事で得た情報を盛りこみ、「結」で深まった考えを書くようにした。学習用コンピュータのワープロソフトを使って意見文をまとめ、友達どうしで読み合った。記事の内容が自分の考えを深める根拠になっているかを確認し、友達からももらったアドバイスをもとに修正を繰り返した。

修学旅行での友禅染め体験をもとにまとめたこれまでの考えに、「日本刀の質のよさが、海外でも注目されている記事」や、「伝統工芸の後継者の成り手がなく、減ってきている記事」を盛りこんで再構成させ、ま



意見文をまとめる児童



意見文で使う記事を選ぶ児童



新しい情報を確認する児童

めに、「伝統工芸の楽しさを、みんなにPRしていきたい。」「今後も新聞に目を通して、いつまでも伝統工芸に興味をもち続けていけるように心がけたい。」といった、自分として何ができるのかについて、具体的な取り組みを提案させることができた。

■まとめ

活動後の児童の振り返りシートに、「新聞記事と、それにつ

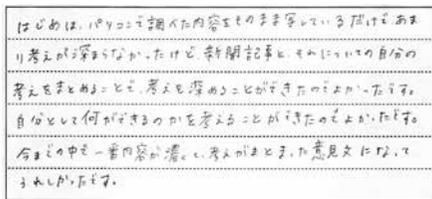
いての自分の考えをまとめることで、考えを深めることができた」「自分として何ができるのかを考えることができた」という記述が見られた。新しい発見や視野を広げる記事を使って意見文をまとめたことで、児童の考えを深めることにつながったことが確認できた。

今後も、考えを深めるうえで効果的なツールを活用しつつ、どのような課題や題材を与えていくと、より深い学びにつながるかを考え、実践していきたい。

(著作権の関係上、図版の一部を表示していません。)

 <p>「しかし今、伝統工芸の後継者の成り手がなく、減ってきている記事もあった。そこで、最近では、伝統工芸品の良さを全体的に、若い人たちにも理解してもらおうと、体験教室を開いたり、今時のものにアレンジしてPR活動をしたりしているようだ。そのような活動をしたら、今の若い人たちに、フアツシヨンの一つとして注目され、日本の伝統工芸のよさを改めて感じるよい機会となっているようだ。」</p>	<p>このように、日本の伝統工芸は、日本のよさであり、未来をよりよいものにしていくための一つの手段なのである。だから、僕は、伝統工芸を体験した時の楽しさを、みんなにPRしていきたい。また、今後も新聞に目を通して、いつまでも伝統工芸に興味を持ちたい。そうすることで、日本の伝統工芸を守りたい。そうしたいと思う。</p>
記事から得た情報	まとめ

児童が書いた意見文の一部



振り返りシートに書かれた児童の記述

用紙の大きさや形をを考えて書く

— 小筆を使って —

千葉県匝瑳市立八日市場小学校教諭
向後理恵

◆はじめに

児童は、高学年段階の学校生活において、下級生へのメッセージカード、委員会からのお知らせ、行事のプログラムなど、多様な書く活動の機会が与えられる。その際、言葉や文章を読みやすく効果的に書くためには、文字の大きさや間隔を整え、字配りよく書く力が必要になる。しかし、実際には、用紙の片側に文字が偏っていたり、文字列が蛇行していたり、文字が入りきらずに最後の方で小さくなっていたりする。一つ一つの文字を整えて書くことを意識しても、用紙全体との関係や配列を意識して書いている児童は少ないと思われる。

そこで、六年生における小筆を使った学習で、いろいろな形の用紙を使って書く活動を取り入れることで、「用紙に対する文字のバランス感

覚」をつかませたいと考えた。

また、小筆だけでなく、筆ペンも活用し、書写の時間に限らず、他の教科・領域等の学習活動の中でも積極的に取り入れ、日常化を図ろうと考えた。

実践にあたっては、勤務校の他、匝瑳市立豊和小学校においてゲストティーチャーをする機会を得ることができた。これら二校での実践を紹介したい。

◆授業実践について

単元名 字配りを工夫し、配列を整えて書く

「この道や行く人なしに秋の暮」

本単元では、これまで学習してきたことを生かして、文字の大きさと用紙全体との関係に注意し、字配りよく書くことをねらいとしている。

学習指導要領解説においても、高学年では、

「用紙全体との関係から判断される文字の大きさ」を考えて書くこと、「用紙全体との関係から考えられる文字の位置、字間、行間などの効果的な在り方」について示されている。

単元の目標

○字配りや文字の大きさに気をつけて、進んで書こうとしている。(関心・意欲・態度)
○用紙の大きさや形に応じて、字配りや文字の大きさを整えることの効果を理解することができる。(知識・理解)

○用紙の大きさや形に対する字配りや文字の大きさに気をつけて、効果的に書くことができる。(技能)

○常に用紙の大きさや形に対する字配りや文字の大きさに気をつけて書こうとする意識をもつことができる。(書写の日常化)

指導計画(三時間扱い)

「二時間め」半紙に「この道や行く人なしに秋の暮」を書く。

「二時間め」いろいろな形の用紙に、「この道や行く人なしに秋の暮」を、筆記用具を選んで書く。

「三時間め」自分の好きな俳句や短歌、随筆などを、用紙と筆記用具を選んで書く。

一時間めは、半紙を使用して効果的な字配りについて学習した。試し書きのあと、基準として「余白のバランス」「行間のバランス」「中心をそろえる」「文字の大きさ」についておさえた。自分の課題を見つけ、それに合った練習用紙を使って練習したあと、まとめ書きを行った。

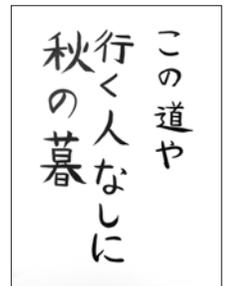
二時間めは、三種類の用紙を用意し、用紙の形や大きさに対する字配りや文字の大きさを考えさせた。そして、一時間めと同様、自分の課題に合った練習用紙を使って練習したあと、まとめ書きを行った。

三時間めは、「自分の好きな俳句や短歌、随筆などを、用紙と筆記用具を選んで書く」活動を行った。

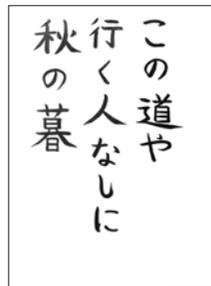
これらの活動を通して、日常生活での文字を書くさまざまな場面においても、効果的な字配りを意識できるようになることが最終的なねらいである。

〈児童の変容〉

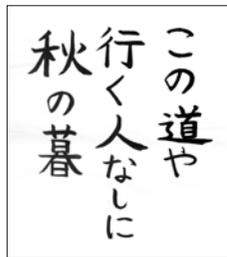
1時間め
試し書き



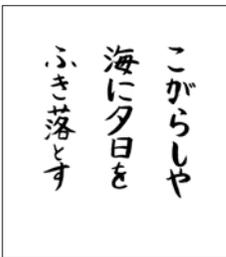
1時間め
まとめ書き



2時間め
まとめ書き



3時間め



他の俳句に挑戦！
文字の大きさを整え、バランスのよい余白が生まれた。

違う形の用紙でも、
バランスよく書くことができた。

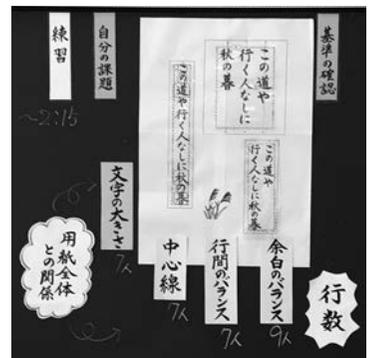
行間が整ってきた。



近くの友達と相互評価



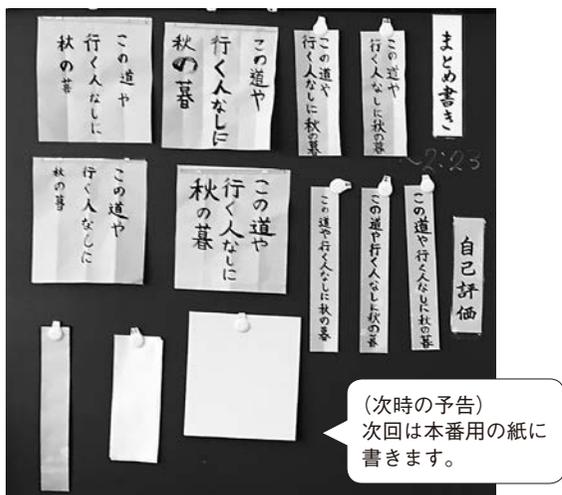
選んだ用紙にまとめ書き



自分の課題を見つけ、練習用紙を選択

指導の流れ (2/3 時間め)

まとめ 12分	練習 20分	基準確認 5分	目標把握 8分	過程 時配
7 6 まとめ書きをして自己評価をする。 次時の学習内容を知る。	5 自分の課題に合った練習用紙を選択し、練習する。	4 〔基準〕 ・余白のバランス ・行間のバランス ・中心をそろえる ・文字の大きさ	3 用紙の大きさや形による字配りの違いについて、気をつけることを話し合う。 2 1 前時の学習を想起する。 本時のめあてを確認する。 いろいろな形の用紙に、 字配りを工夫し、配列を整えて書こう。	学習活動と内容
	○今日のめあてをどれくらい達成できているか評価する。 ○友達どうしでもお互いに評価し合うように促す。 ○次回は、好きな俳句や短歌、随筆を、用紙と筆記用具を選んで書くことを伝える。	○自分の課題に合った練習ができるように、個別に声をかける。 ・上下、左右の余白のバランス ・中心線、行間のバランス ・文字の大きさ	○三種の形が異なる用紙を見せ、それぞれの字配りをイメージさせる。 ○字配りよく書くためのポイント(基準)を提示する。 ○注意すべき点をフェルトペンなどで書き込ませる。 ○前時のまとめ書き、自己評価を見ながら、本時の自分の課題を決める。	教師の指導・支援 ○前時の試し書きとまとめ書きを掲示し、めあてがどれくらい達成できたかを確認する。 ○三種類の用紙を工夫し、配列を整えて書こう。

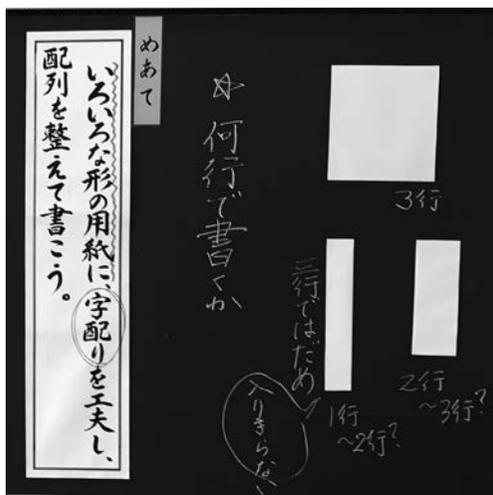


まとめ書きを黒板に貼り、相互評価を行う

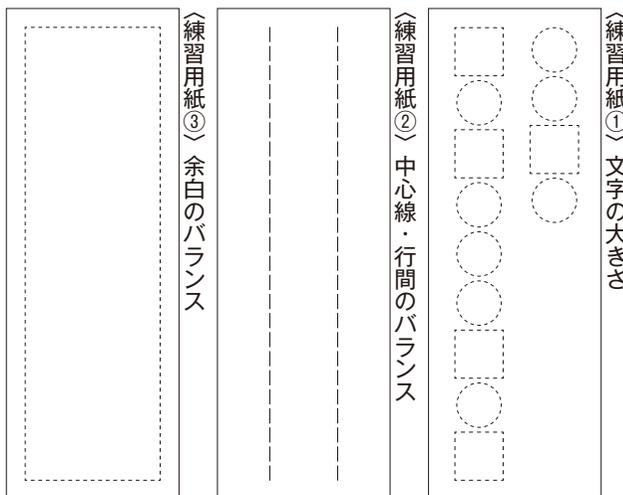
◆用紙・練習用紙の工夫

三種類の用紙には、「八つ切り画用紙四分の一大」色紙大「短冊」を用いて、それぞれの用紙に対して、三種類の練習用紙を用意した。自分が書いてみたい用紙を選択することで、学習意欲が向上すると考えた。また、自分の課題解決のための練習用紙を使うことは、それぞれの課題に応じて学習を進めることができ、ねらいの達成に効果的であると考えた。

なお、一人一人が三種類の用紙を使って取り組む時間の確保は難しいため、友達との相互評価を取り入れることで、用紙の形や大きさによる書き方の工夫に気づかせようと考えた。



どの用紙を選んで、何行で書くか



八つ切り画用紙1/4大の用紙の場合、練習用紙

◆小筆の使用

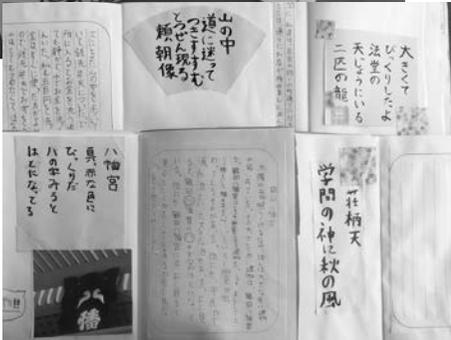
毛筆で書く書写が不得意であるという意識をもっている児童は多い。筆使いを覚え、上手に書くためには、毛筆で書く機会の確保が必要になる。少しでも多くの文字を書く経験を通して筆の扱いに慣れさせるためには、小筆の使用は有効であると考える。そこで、書写の時間以外にも、小筆を使う機会を積極的に設けてきた。

- ①「小筆・筆ペンコーナー」の設置
- ②他教科の学習のまとめで活用
- ③学級通信の題字で活用

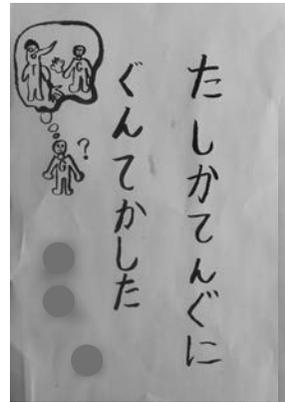
また、小筆の使い方に難しさを感じている児童には、筆ペンを使う機会も設けている。書写の時間では状況に応じて使い、書写の時間以外では自由に使うこととしている。



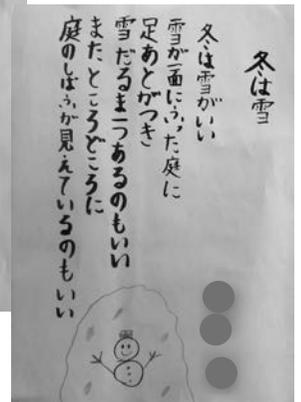
小筆・筆ペンコーナー



修学旅行のまとめ（総合的な学習の時間）



回文を作ろう（国語）



自分流『枕草子』（国語）

◆終わりに

書写における「用紙の大きさや形を考えて書く」学習は、日常のさまざまな書字活動に生かすことのできる大切な学習である。また、書写活動の際に「小筆を使う」ことで、適度な緊張感、集中力をもつことができる。そのため、一文字一文字の字形はもちろん、「字配り」や「文字の大きさ」をより意識することができる。本単元を実施したことで、これらのことを実感した。

書写の授業の中では、「①試書→②基準の確認→③練習→④まとめ書き」の流れで学習を進めている。この流れの中で、「字配り」と「文字の大きさ」については、はっきりと成果が表れた。その後、日常の中で、学んだことをどれだけ生かせるかが課題である。書写の時間だけでなく、日常のさまざまな書字活動においても、教師自身が意識して指導していかなければならない。そして、その成果を認めていくことで技能が身につけていくと考える。

子どもたちには、さまざまな場面で文字を書く楽しさを感じてほしい。そのために、今後も他の教育活動と関連させた書写の学習に取り組んでいくつもりである。そして、自分の伝えたいことを、より効果的に表現できるようにすることを目指していきたい。



第15回

地球となかよしメッセージ

作品募集(2017年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2017年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前
回
入
選
作
品



ピカピカのいのち

ぼくは、生まれてはじめて、せみがおとなになる
ところを見ました。今までせみのぬげがらは見たこ
とがあったけど、こんなきれいなのが出てくるなん
てしりませんでした。白くてすぎとおってて、い
のちのほうせきみたいでした。そおとさわってみ
たら、ぶにとっていました。なんだかこわれそう
なので、ぼくは、どきどきしました。

小学国語通信 ことばだよ (2017年 春号) 2017年3月31日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局 発行: 教育出版株式会社 代表者: 山崎富士雄
印刷: 大日本印刷株式会社 発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/> 03-3238-6901 (配送について)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411